

あしたの郊外

「取手アートプロジェクトの広報紙」

—— 郊外のまち茨城県取手市で、17年続くアートプロジェクト

創刊号

TAKE FREE

Toride
IBARAKI



Contents

- 2 取手アート不動産
減量住宅
- 3 | 座談会 | いま、郊外を語る理由
馬場正尊 × 池田修 × 若林幹夫
- 6 空想団地リノベーション
[第1回 UR戸頭団地] 一番高い部屋
- 7 取手のひと／取手のしごと
- 8 取手アートプロジェクト
半農半芸 アーティスト・イン・レジデンス「%o(パーミル)」

取 手市の西に位置する戸頭団地。この団地の壁面には、住民から寄せられたエピソードをもとに、アーティストの上原耕生が空想を繰り広げた作品群「IN MY GARDEN」が広がっています。春を感じる季節になってきたある日、戸頭団地では、鳥に扮した人々が踊る様子が観察されました。

[団地壁面作品] IN MY GARDEN(At home、ここだけのなし、Book climbing) 2015年
UR都市機構・TAP共同プロジェクト 制作=上原耕生
[パフォーマンス] 動詞で踊る「Doshiyoミュージックパレード」2015年3月8日開催
会場=戸頭団地 企画=TAP、一般社団法人谷中のおかって 演出=富塚絵美 撮影=伊藤友二

TAPペーパー
はじまります!!





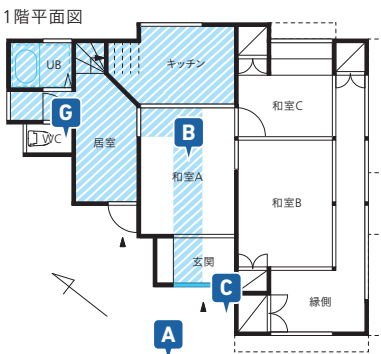
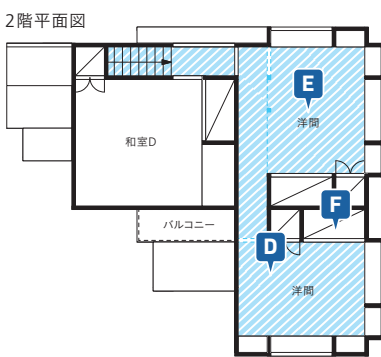
生活するのに不要な部屋の床を減量。玄関を入れてすぐの部屋の畳を外し、板をはがし、地面が出てきて。夕涼みには最適な縁側ができました。



減量住宅の外観



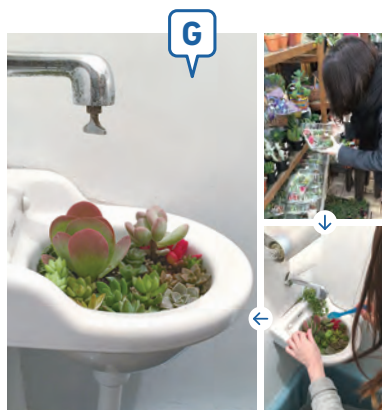
昔ながらのポストも少しだけ理想の姿へ。



水色で記された場所が、生活に利用する空間と動線から割り出された、減量後の理想体型の間取。



生活するスペースを確保するために、多くの人に協力してもらいながら大改修。床に貼る板は安価な素材を購入し、表面をやするところから。黒く塗ったフローリングで、シックな寝室兼仕事場が完成しました。



お手洗いにある小さな手洗いスペースは、多肉植物を寄せ植えしてかわいい森に。



昔ながらの2段組になった押入れ。間の板を抜き、白く塗ったらクローゼットになりました。



わいわいと仲間が集まるリビング。壁を抜き、残った柱は愛猫のためのキャットタワーに。

郊外の住宅 減量中

全国で800万戸に達すると言われる空き家の急増を牽引するともいえる郊外だが、取手のある一軒家で進行しているプロジェクトがともするとその現状に一石を投じるかもしれない。

その手法は、ダイエットである。といっても、ダイエットの主体は人ではなく「家」だ。アーティストが空き家に約1年半暮らす。その間の家賃をオーナーは無料にする代わりに、作家が「家」に住みながら「理想体型」にシェイプアップするべく、減量作業を行う。作家は家の適正体重、適正サイズを考えながら減量するパーツを決め、日々家を減らしながら現代の郊外での生活に必要なとされる私たちへと家をアップデートしていくのだ。つまり解体改修、リノベーションによる付加価値が、家賃の無償期間と引き換えに家に提供される仕組みである。

「空き家が抱える余計な脂肪は、耐震問題や老朽化、風景の損失や治安悪化、固定資産税や維持監理、不動産流通、解体についてなど色々あり、社会問題になっています。そんな住宅が生きているのは人口減少や地域縮小などと言われていく土地であり、減量して魅力的になるか、瘦せて負担を無くす必要があります。減量すれば建物は再び愛され、機能や仕様は今日的なものになり、解体して更地になるときまで建物と一緒にいられます」とは、提案者のアーティスト飯名悠生の弁。減量の完了予定は今年の12月。郊外の家の理想体型を探りつつ、「家」という固定された枠が可変なものになっていく、その過程を見せてくれるのではないだろうか。その姿に乞うご期待。

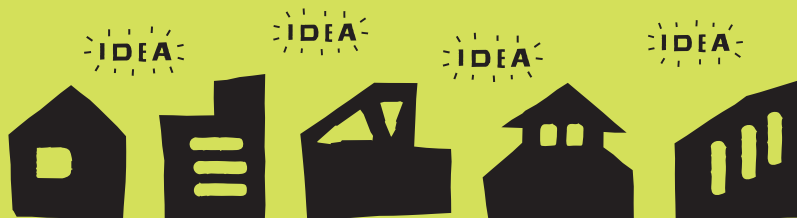
作家による日々の減量レポートはこちら→
genryou-juutaku.strikingly.com



広告

**TORIDE
ART
不動産**
torideartestate.jp

“ありえない日常”を手に入れよう！



「取手アート不動産」は取手の住まいや暮らしに対して、アーティストやクリエイターのアイデアを提案していくプロジェクトです。当サイトでは「物件」「アイディア」「コラム」を提供・販売しています。都会でも、田舎でもない。郊外・取手だからこそできる暮らしをご紹介します。

取手アート不動産



座談会

Round-Table Talk

馬場正尊

建築家・Open A代表
東北芸術工科大学准教授

池田修

BankART1929代表
PHスタジオ代表

若林幹夫

社会学者
早稲田大学教授

いま、郊外について

語る理由

アートに関心のある人々は、
「郊外」の未来をどのように憂い、
そしてなぜ、「郊外」について語るのか。
建築、アート、都市社会学の
視座から3人が語る。



取手を通して 郊外のアイデンティティ を考える

馬場正尊（以下、馬場） 僕が取手アートプロジェクト（以下、TAP）に関わるようになった3年くらい前というのは、TAPがちょうど大きな転機を迎えていた頃だったと思います。TAPが始まった当時は、もともと東京芸大があったこともあり、さまざまな場所に作品が展示される華やかなアートイベント、という様相が強かった。ところが時は流れ、今や全国各地でアートイベント花盛りという状況です。その中でかなり早い段階から活動していたTAPは、団地で事務所を構えるなど、自分たちが立脚している場所をベースに、以前とは少し違うスタンスでアートを考えようとし始めた。

そんな中で作品というモノを展示するのではなく、一泊二日で来たアノニマスなお客さんを、団地の住人たちがホテルマンを演じながらもてなすドラマをアートとして提示する『サンセルフホテル』といった作品が生まれてきた。僕としては「これを果たしてアートと呼んでいいのだろうか」と思うくらい、形がなくて、偶然性にあふれた作品です。その様子を見ながら、アートの位相がずいぶん変わってきたのではないか、と思い始めました。つまり、この取手という郊外でアートプロジェクトをやる意味、やることのアイデンティティを考え始めたのが「あしたの郊外」のきっかけです。

瀬戸内国際芸術祭のような、圧倒的な自然、圧倒的な人口減や過疎といった状況のなかで行われるアートプロジェクトは、ある種のフォーマットが見えてきています。一方、札幌や名古屋では、都市のすきまでアートがどういうふう振る舞うか、都市的な文脈とアートの文脈がどう距離感を持つかというところで語られている。では、この都会でも田舎でも

ない、ドラマティックな風景があるわけでもない、人口がたくさんいるわけでもない、ベッドタウンと呼ばれる郊外でアートが果たす役割とは何なのか、果たして存在意義はあるのか。

昔は都市政策によって、過密する中心を避けるために郊外というものを量産してベッドタウンと名づけた。でも今は高齢化や過疎も進み、郊外に住む人は減る一方で都心居住は進んでいて、郊外に住む目的はどんどん薄れている。一方で僕は郊外育ちだから、原風景として懐かしくもあるんです。ただ今の若い世代にとっては必ずしもそうではない。今後、郊外というものがどうなっていくのか、朽ちていくのか減っていくのか、それとも違うアイデンティティを獲得するのか。僕は建築や都市計画のフィールドから、それをずっと考えてきました。

ただ、なかなか確かな解答が見つからなかった時に、アートという、僕から見ると少しつかみにくい概念を通して、「郊外」を考えるプロジェクトにできないかと考えた。そこで「あしたの郊外」という言葉を立てて、池田さんやアーティストの「目」、あるいはアート・プロデューサーの栗栖さんといった、背景も世代もバラバラの人たちと一緒に語り始めたところだ。

池田修（以下、池田） TAPはもともと、東京芸大というある種、非常に特別な学校周辺のアートプロジェクトという様相を強く帯びていました。それが「郊外」という、より一般的で大きな問いに向かった。僕個人としては「果たしてその問題の設定の仕方はどうだろう」と思いながら見ていることは確かです。郊外は、別に取手でなくてもいいわけだし。それが問題をわかり



馬場正尊 Masataka Baba

Open A代表。東北芸術工科大学准教授。建築家。1968年佐賀生まれ。1994年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂、早稲田大学博士課程、雑誌『A』編集長を経て、2002年Open Aを設立。新しい視点で不動産を発見し、紹介していくサイト「東京R不動産」を運営。東京のイーストサイド、日本橋や神田の空きビルを時限的にギャラリーにするイベント、CET (Central East Tokyo) のディレクターなども務め、建築設計を基軸としながら、メディアや不動産などを横断しながら活動している。



池田修 Osamu Ikeda

BankART1929代表。PHスタジオ代表。1984年、都市に棲むことをテーマに美術と建築を横断するチームPHスタジオを発足。美術館での展覧会、屋外での美術プロジェクト、建築設計等、活動は多岐にわたる。1986～91年ヒルサイドギャラリーディレクター。2004年からBank ART1929の立ち上げと運営に携わり、数々の企画展やアートプロジェクト、アーティスト支援、出版等を行なってきた。大学や行政機関、街づくり、アート関係での講演・シンポジウム参加も多い。



若林幹夫 Mikio Wakabayashi

社会学者。早稲田大学教育・総合科学学術院教授。1986年東京大学教養学部卒、1990年同大学院社会学研究科中退後、博士（社会学）の学位取得。筑波大学教授等を経て、2005年より早稲田大学教授。『熱い都市 冷たい都市』『都市のアレゴリー』『未来都市は今』などの都市論の仕事を主軸に、『メディアとしての電話』『地図の想像力』『漱石のリアル』『未来の社会学』など、メディア、空間、時間などをめぐって社会学的に考え、文章を書いてきた。郊外論としては『郊外の社会学』『モール化する都市と社会』などがある。

にくくしている部分もあると思う。

若林幹夫（以下、若林） 「郊外」という問いと、取手で何かやっていこうというのは、重なるところもあるけれど、ずれていく部分もあるじゃないですか。でも取手を通して、郊外について見えてくる部分というものもあると思う。相互に触発しあうような対話があれば、きつと面白いだろうな、と思いますけどね。

馬場 池田さんには開口一番、「郊外って年金問題くらいでかい問題だぞ」と言われたのをよく憶えているんです。でも、郊外とアートについて語るものはこれまであまりなかったから、いい機会だなと。取手という場所性ならではの、サイトスペシフィックな解答もあっていいし、もっと一般的な解答もあって、それらが混在しているいい。

池田 今回は国交省の助成事業のアート部門という印象を受けたんですけど、それは合っていますか？

馬場 「あしたの郊外」と「取手アート不動産」は、国土交通省の空き家対策事業の助成対象プロジェクトになっていて、全国の20都市くらいで福祉や教育といったテーマの取り組みが並んでいる中に唯一、アートというすごく珍しい切り口が入っています。

池田 北川フラムさんがやってきた『越後妻有アートトリエンナーレ』も実を言えば、里山をつくるという言い方で、市町村合併を推進するプロジェクトが始まりだったんですよ。もともと妻有は市町村だったけれど、今は十日町市と津南町だけですからね。

馬場 平成の大合併とリンクしているんですね。

池田 国は相当焦っていますからね。里山、高齢化した農村、それから団地、年金といった問題が起きて、何百万人というレベルでおかしくなっている。それを何とかしなければいけない、という構造ですよ。

—「図説」いま、郊外について語る理由

郊外を語る言葉が足りない

若林 僕は社会学者で、アーティストでもないし建築家でもない。今おふたりの話を聞きながら、自分は郊外を年金問題、高齢化問題、郊外の衰退などのいわゆる「問題」として考えているわけじゃないんだな、と再認識しました。僕にとつて、郊外はまずはとても個人的な問題としてあって、そのことが社会的な問題にもなっているんです。

僕は東京の町田で生まれました。雑木林や畑は子どもの頃はたくさんあったものの、それらが段々なくなって、どこまでいっても住宅が続くようになっていった郊外の薄っぺらい風景が、あまり面白くなかった。高校から都心の学校に通うようになったら、東京って「ひだ」のように色々な場所があつて、風景が豊かで、すごく魅力を感じたんです。そんな都市の空間に魅力を感じて、都市論を始めた。今から思うと郊外居住者の都市コンプレックスみたいなものがあつたんです。

でも一方で、自分の住んでいるこの平坦な風景をどのように語ることができるのだろうか、ということも、ずっと頭の片隅にあつたんですよ。その思いがだんだん強くなってきた頃、90年代にパルコの『アクロス』という雑誌で郊外論を書きませんか、という依頼があつた。それで東京や横浜の郊外を見て回っているうちに、自分の知っていた郊外とは、また別の郊外の風景が見えてきたんです。最初に気づいたのは「小人」です。

馬場 小人？

若林 住宅地を歩いていると、新しくできた可愛い家の庭に、デイズニーアニメの白雪姫に出てくる小人や、リスとかウサギとかがいる。80年代後半から90年代初頭の多摩ニュータウンでは、ベルコリーヌ南大沢とか、ヴェルデ秋葉台とか、おしゃやかな団地が増えてきた頃で、

— Edit 石井風希 Illustration 武藤舞子

戸建て住宅の造成地でもいわゆる「ショートケーキハウス」が増えてきた時期だったんですね。これまで無愛想で無機能的だと思っていた郊外の風景のなかに、これまでとは異なる層が現れてきたのに気がつくと同時に、あの無愛想で無機的に見えた郊外の風景も、郊外の歴史が生み出した表情の一つだったんだと気がついたので。

もうひとつは、両親とも先祖代々、（郊外化される前の）町田に住んできた旧住民なんです。僕にとって町田は、郊外であると同時に「ふるさと」でもあるんですよ。その記憶と血脈は近代の大衆社会の中に消えていく運命にあって、僕はその末裔という意識が子どもの頃からあつた。そうした歴史の流れの中で自分の人生を振り返った時に、郊外の60年代、90年代にかけての変貌と、自分があの土地で生きてきたことの意味みたいなものが見えてきた。「俺は郊外について書かなきゃいけないんじゃないか」という使命感みたいなものが湧いてきたんです。

自分が生きてきて、自分の社会に対する感覚やアイデンティティをつくってきた場所の経験や歴史に、言葉を与えたい。郊外がのっぺりして見える理由って、都市を語る言葉の豊かさに対して、郊外を語る言葉が貧困だからじゃないか。レム・コールハースが『錯乱のニューヨーク』で「私はマンハッタンのゴーストライターであつた」と書いたでしょう。郊外生まれ郊外育ちとして、おれは郊外のゴーストライターになってやろうと思つて。語られていなかった「わたし」や「わたしたち」にどういう言葉を与えるのか。東京の周りをぐるっと取り囲む郊外には、同じような気持ちで生きてきた人間がたくさんいる。語られてこなかった「郊外」という経験に言葉を与えたいという欲望で、僕の郊外論はでき上がっているんです。

馬場 若林さんは独特のポエティックさ

「語られてこなかった“郊外”という経験に言葉を与えたい——」





「受け入れなければいけない現実として
郊外の風景があり、それが美しくも見える——」

を抱えつつ、郊外を主語として語っていますね。一貫してポジティブに語っているんですか？

若林 ネガティブに語ることは簡単ですよ。外から見れば薄っぺらにみえるかもしれないけれど、そこで生きてきた人間にとっては、そこで生きられてきた関係性があり、思いがあり、沢山の人が生きてきた歴史というものがある。郊外の薄っぺらさを生きてきた人びとの生の形と、ただ郊外を批判的に捉えて商店街とかコミュニティの再生とか言っても、意味が無いと思ってるんですよ。

社会学でも、都市や農村について言葉はいっぱいあるんです。でも郊外って「都市と農村のあいだ」みたいな感じで規定されて、これまで固有の対象として語られてこなかったんじゃないか。

馬場 そこに圧倒的な人口がいるにもかかわらず。

原風景としての郊外

馬場 建築の文脈でも、郊外について多くは語られていませんよね。僕や藤村龍至さんなど郊外育ちの建築家が語り始めたのが、最近だと思えます。少し年上ですが、写真家のホンマタカシさんは「郊外」をドライに撮っていて、ああ分かる分かる、と思って見ていました。受け入れなければいけない現実として郊外の風景があり、それが美しくも見える、という切り取り方をしている。シニカルなのか愛があるのかすら、分からない。

池田 僕は大阪の「粉浜（こはま）」というまちで育ちました。大阪のど真ん中から地下鉄の駅で3つか4つくらい、都市と郊外との境界線に属するようなまちです。粉浜自体は千年、二千年という歴史を持つ住吉大社の近くで、古いまちなんです。近くに「玉出駅」という日本で初めてできた地下鉄の駅があるんですが、

その少し先にやはり日本で最初期の団地ができた。それが1970年頃、僕が12歳の頃ですね。

僕が中学生の頃に、転校生たちがある日いきなりドツと学校にやって来た。その、どこの生まれかわからない子たちに対して、僕らは興味津々で。その中に可愛い女の子がいて、放課後に自転車で皆で団地に遊びに行ったりしていて。でもその子が、いつの間にか飛び降り自殺しちゃった、ということがあった。

否定も肯定もないけど、僕にとって、団地というのはそういう場所。根っこがない、どこから来てどこに行くのかわからないチームとして、僕らの前に宇宙人のように現れた。僕らも団地の中で遊んでいたけど、知らない人たちの場所、という感じがすね。それが、いきなり生まれる。平安や奈良といった時代から、都市はそういうものを生み出してきたんじゃないか。いつの間にか知らない民族がやってきて、「異文化と接している」という感覚がいつの間にか都市に吸収されていく。（郊外を語る言葉が少なく）都市論にしかないのは、結局、権力側からしか語られないから。たぶん、異文化の側から見えてはいないからでしょうね。

若林 郊外って英語で「SUBURB」、つまり（URB＝都市＋SUB＝下）に、という語源から）「都市に付属している場所」という意味です。歴史的に見ると、たしかに都市の中心部と居住地域というのは、古代からあったはずなんです。ただ都市の歴史において、郊外の方が圧倒的にボリュームを持っていたのは、近代以降なんですね。交通機関の発達、そして都心部に経済的な機能をもつていくと、それを支えるだけの人口が都市に居住できなくなってきた。だから都市に付属している場所にもかかわらず、面積的にも人口ボリュームとしても、郊外の方が圧倒的にでかくなっている。ところがそれについて語られる言

葉は依然として都市の側からか、伝統的な社会としての農村の側から。その結果、巨大な空白地帯みたいなのができてしまった。

池田 やっぱり都市にいる人が貴族という構造になっているんでしょうね。豊かな都市には労働者と貴族をどこかでひっくり返す力もあって、反転が起こるんじゃないけど。

若林 グローバルなことについて、ローカルな場所を考えることで初めて理解できるし、グローバルな構造が分かってくる。ローカルな場所で生きてきたことの意味がわかるということがある。「郊外」をもっと大きな構造の中に置き直してみたら時に、分かることがあるはずなんです。

馬場 僕の個人的な感覚からいうと、郊外は懐かしいんですね。僕の親は転勤族でいろいろなところを転々としていたのですが、小学校の前半は九州の久留米の郊外で、後半が福岡の堤団地で育った。僕が住んでいたのは団地の隣の一軒家でしたが、遊び場は団地。だから身体スケールとして団地が染み込んでいる。

池田 いや、僕も（団地は）全然、楽しいと思うんだけど。でも郊外の生み出し方と原発の生み出し方が、ある意味でパラレルに動いているところがあると思うんです。「いけるぞ、これは」という政府の方針なんです。ウキウキ、いっぱい作っちゃった。それで10年くらいは上手くいったぞ、と。ところが40年もつシステムじゃなかった。

馬場 おれ、いま廃炉処理みたいな感じで、リノベーションとかしてるのかな（笑）。でも案外ウキウキで、廃炉処理している感じなんですけどね。

上手く言えないんですけど、僕らには自分の生い立ちを少しでも肯定したいという本能があるのかもしれないね。ちよっと自己憐憫もあるんですよ。例えば、郊外のまあまあ大型ショッピングセンターで買い物かごを抱えて、いろいろな物

に囲まれてポーツと頭を空っぽにする時間の、埋没していく感覚って、けっこう嫌いじゃない。アンドレアス・グルスキーの写真作品を見た時の気持ちよさみたいな。大量の同じものに囲まれて、個性を剥奪される、意思を奪われている状態の気持ちよさみたいなものを、体内のどこかに持っている。是非かは置いておいて、大量消費の風景が懐かしい。論理的にはそう感じたくなんだけど、いかんともしたい。

そういう記憶があるので、郊外には愛着がある。けどもう、マクロ的な施策や問題のことも分かっている自分もいるので、どこかしら冷めている自分もいる。だから結果的に、自己憐憫みたいな感覚で郊外を捉えてしまっているんだな。いま、おふたりの話を聞いていて、そう思いましたね。郊外について多くの場合、哀しく書かれたり、批判的に書かれたりするのを読むと「ああそうだな」と思う反面、ちよっと悲しいんですね。あの悲しさの謎が、ちよびつと解けた感じ。

座談会はこの後、郊外に住む必然性や制度の問題点にまで話が及びました。続きは左記の「あしたの郊外ウェブサイト」をご覧ください。ただくことができます。

ashitanokougai.com

ウェブサイトでは以下の座談会も公開中！

「郊外を解きほぐす新しい身体性」

栗栖良依（スローレーベル ディレクター）

石神夏希（ペビン結構設計）

森司（アーツカウンシル東京・TAP実施副本部長）

「アーティストと郊外」

住友文彦（アーツ前橋 館長）

南川憲二・荒神明香（現代芸術家チーム 目[め]）

熊倉純子（東京芸術大学教授・TAP実施副本部長）

READ MORE



空想団地 リノベーション

第1回●UR戸頭団地 「一番高い部屋」

(想定に住人…3人の同居する仲間)

私たちの「郊外」の風景の中に、団地もそのひとつとして存在している。継承される「郊外」に、いま新たな暮らしの可能性を見つけることができるのではないか。その考え方、暮らし方こそが「リノベーション」と呼ばれるのかもしれない。ここでは、その「種子」を実際の団地の空間の中から拾い上げ、空想のリノベーションを考えてみます。

空想リノベの匠



新堀 学さん
建築家
新堀アトリエ
一級建築士事務所代表



佐藤 悠さん
アーティスト
東京芸術大学大学院
博士後期課程在籍

●UR(独立行政法人都市再生機構)の団地

1955年の住宅公団設立から住宅都市整備公団を経て都市再生機構となった、いわゆる「公団の団地」は、鉄筋コンクリート造の集合型住宅を日本に普及させた住戸タイプである。住宅公団の更に前の同潤会からの日本における鉄筋コンクリート造の集合住宅の設計では、鉄筋コンクリートの「構造」と、木造の日本の生活空間の「間取り」「長押・ふすま等の造作」を組み合わせるための工夫、試行錯誤が行われて作り上げられてきた。

●戸頭団地

利根川を挟んで茨城県の入口となる取手市。戸頭団地は、常総線「戸頭」駅前に位置し、同駅から2駅の守谷駅からはつくばエクスプレスを利用できるので都心へのアクセスも良好です。団地内は歩車分離で安全な空間が形成されており、いちょうとメタセコイアが美しい遊歩道は住民の憩いの場となっています。また、スーパーやクリニック、教育施設も身近に整っており、日々の生活に大変便利な環境です。



アクセス	関東鉄道常総線「戸頭」駅より徒歩3～12分
完成年月	1975年4月～1992年8月
総戸数	1,187戸
家賃	42,900円～74,100円(別途共益費3,600円)
駐車場	4,968円

●物件のお問い合わせ

UR賃貸ショップ取手駅前
住所：茨城県取手市取手3-4-8 海方ビル4階
TEL:0297-77-5600 営業時間:10:00-18:00 定休日:水曜

詳しくはホームページをご覧ください。

UR 茨城

検索

新堀学(以下、新堀) この中央の

広い廊下がパブリックだよ。今どきのマンションや戸建てでは廊下幅は1メートルぐらいがいいところだけど、東北の方ではこういう廊下幅一間(＝約1・8メートル)って普通なの。ここならテーブル置いてもおかしくないし。例えば全部両側の建具外しちゃったら、部屋も1・5倍くらいになるじゃないですか。

佐藤悠(以下、佐藤) 机ギリギリまで置いて。そういう使い方も確かにありますよね。

新堀 収納置いても通り道ぶさがないし、部屋に人を呼んでも前室みたいになるし。廊下が結構ちゃんとした広さを持つてるのはいいなっていうのを東北の間取りに教わったんです。廊下が狭いと通るだけのスペースになっちゃうから。

佐藤 廊下としての使い方しかできない。

新堀 融通きかないんですよ。でもこれだけあると、右か左かどこを通路にするか選べる。残りは自由にできるわけですよ。この中央のパブリックスペースがあるのはいいと思う。部屋の中だけ、庭のようなもの。

佐藤 共有スペースですね。

新堀 ただ突き当たり(現在は洗濯機用のスペース)に、もうちょっと

愛があるといいよね。曇りガラスの小さな窓で景色が見えないけど、そこが透明なガラスで遠く筑波山まで見えたらし。個室に入らないでみんなここで生活するんじゃないかな。

佐藤 そうですね。ここはもうこの廊下だけでも成立するギリギリの広さがいい感じですね。特徴的な。廊下なのか、居間なのか。

新堀 洗濯機は外に置いて、この突き当たりは机置いて書斎コーナーだよ。

佐藤 あーいいですね。向こうの風景を眺めながら。そこを物書きの人とかいいですよ。

新堀 集中できてね。こういうコーナーが1つだけあるだけでも別に広くなくても愛せるじゃない。

佐藤 ここが好きなんだよっていう場所が部屋の中にあるとよいと。

新堀 中央のパブリックスペースに丸いテーブル置いてさ、照明もペンダントを選んで。編集打ち合わせもできる。

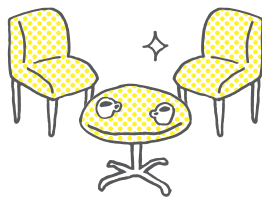
佐藤 まさにそうですね。ピースの又吉さんとかに紹介してもらって。あの人絵になると思うし、すぐ借り

空想リノベアイテム

① お気に入りのライティングテーブル



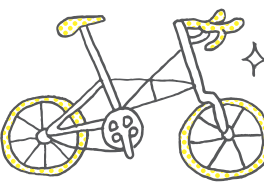
② ミーティングテーブル(小)とダイニングチェア



③ ちょっと見栄をはれるペンダントライト



④ 新・東京ラプソディーの緑色の自転車



Good! 文豪スペース!

Good! はるか筑波山を望む窓!

Good! 幅一間のパブリックスペース!

Good! 最上階の眺めの良い広めのバルコニー!

UR団地／タイプ3B／3K57㎡

参考価格 5.61万円

手つくと思う。ただ、家賃何回払えば元がとれるのかわからないけど。新堀 いいね。芥川賞ハウス。佐藤 団地の文豪ハウス。想像すると、そういう風に見えてきますね。新堀 最初プランだけ見た時にここがストンと抜けててっていう話したじゃない。これが重要だった。だから突き当たりは肝心。ここが活きれば、こっちの部屋が活きるってことなんです。

新堀 バブルの頃には、ガレージがリビングの横っていうのが夢だった時代があるんですよ。(笑)さすがに今、車を見ながら飯食うっていうのをやるよりは、時代は自転車だと思っただよ。でも自転車高いんだよね。グラム単価でいうと世界で一番高いかもしれない。軽ければ軽いほど高いのね。重さ6キロくらいで百万円とか。そういうの外に置けない。

佐藤 盗られちゃいますもんね。

新堀 だから部屋の中に庭があるといいじゃないの。どうですか。トライアスロンする人にはいいんじゃない。

佐藤 いいかもしれない。

新堀 この部屋は、一番「高い」(＝最上階)っていうだけで、何か意図があって見に来たわけじゃないけど。掘り出し物でした。やっぱり一間のパブリックな廊下がいいよ。

佐藤 そして廊下が見えるからあの突き当たりが。

新堀 あれは無駄じゃないですよ。間取り図では、みんなここに使うの?って思うかもしれないけど。これを活かすか活かさないかで全然住み方変わっちゃうよね。この突き当たりがあるからいいと思うね。繰り返すけど。



←地域住民とTAPが運営している、団地内のコミュニティカフェ兼アートスペース「いこいの+TAPPINO」で談笑する中村さん。

今日も
お漬物
ありますよ、
どうぞ。

あの人、この人に
インタビュー！

取手のひと

【井野団地のお母さん】

中村弘子（なかむらひろこ）さん



No. 1

家族4人でね。東京の麻布からここへ越してきたのが昭和44年の8月15日。受け入れの2期目だったから、隣近所も一斉にね。長女はできたての取手幼稚園に通って、井野小は最初の入学生。

その頃は専業主婦で、PTAのお手伝いしたり。自治会もね、交通安全母の会とか。信号がなかったので、月曜から土曜まで、当番で30分くらい立ってました。PTAは仕方なしにね。友達に「やんなさい！」なんて誘われて。交通安全のほうは、やめるにやめられなくて、いまでもみんなずっと一緒にやっています。

嫌いじゃないんでしょうね、やめないうことは。団地のお祭りも、好きじゃないけど嫌いじゃないかなってくらいに、手伝ったりしてね。最初は盆踊りだけだったの。少しずつ盛大になってきました。途中ちよこちゃんも休んではいますけど、なんとか。もうそろそろ引退と思いつつ、何年前からそう言ってるんだろ。

井野団地のお母さん？いやいや、肝っ玉母さんじゃないんだから。母じゃなくて、ばばです。TAPさん（※1）が平成20

年に団地で開催して、誰でも見に来てくだいってという感じだったし、事務所でもコーヒー飲めるっていうんで、友達と。いろいろ見せてもらったりして。行事あるよってときだけ、ちよこつと差し入れてさせてもらったり。お手伝いってほどでないから、差し入れくらいだけ。

最初は不思議だったよね。こんな大きなハイヒールをつくって展示してたりして。芸術家ってなに考えてるんだろうって。びっくりしながら見てましたよ。

「いこいの（※2）」が立ち上がる時、自治会に入ってたから最初からずっと顔を出して。集まるのは嫌いじゃないから、きっかけはなんでもね。今はお茶しにきたりとか、開け閉めも手伝ってます。なんにもしてないんですけどね。守るなんて大げさなことじゃないですけど。

芸術家の人がかいていろいろやっていくけど、いまは不思議とは思わないです。私も変わっているからかな。みんな楽しみながらやってるから、ときどき差し入れくらいね。今日もお漬物ありますよ、どうぞ。



※1「TAPさん」……取手アートプロジェクト ※2「いこいの」……いこいの+TAPPINO

— 取手のひと／取手のしごと

Text+Photo 中嶋希実

TORIDE CITY #1 SINCE 2001

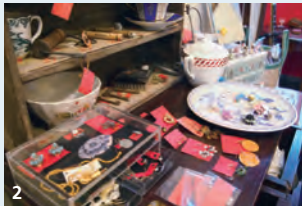
取手のしごと

WORK IN TORIDE

DANDELION CAFÉ

薄井 悟 さん

SATORU USUI INTERVIEW



1.おいしいベトナムコーヒーを出してくれる晃子さん 2.店内にある雑貨コーナー 3.カウンター越しにお客さんと談笑する悟さん

取

手駅の東口からまっすぐ3分ほど、坂を登っていくとダンデライオン・カフェが見えてくる。外にはピンクのスクーター。ランチとバータイムの間の休憩時間、息子さんと晃子（あきこ）さんが「こんにちわ」と迎えてくれて、奥から悟さんが出てくる。「俺はずっと飲み屋をやるうと思っで、昼夜働いてたんですよ。輸入雑貨の問屋で一緒だったのが彼女で、夜はバーで働いて。それしかできないかなって、消去法で。自分で店は始めるときに結婚して。」

ゆっくりと考えながら話をしてくれる店主は、照れ笑いが印象的。お店は15年目を迎えるそう。最初は夜のバーからはじまった。

「当時は若かったから。音楽かけて酒だしとけばいいかなって。まあ、現実を思い知るようなこともあったよね。雑貨並べたり、ランチはじめて、イベントも増えてきて。なに屋でもいいの。カフェだとか、バーだとか、ライブハウスだとか。なんでもいいの。くる人が決めてくれればいいっていうか。ほぼ同じ顔。だいたいいつ来ても同じ。みんな一緒に年とってる感じ。」

カウンターと2人掛けのテーブル席、4人掛けのソファが並ぶ店内。はじめて1人で来たらどう振る舞え

ばいにか迷うかもしれない。「がんばる。なんだろう。友達とくれば話していればいいから楽でしょ。でも1人できて、全然知らない人と話したり。責任とは言わないけど、たのしみたならその人もがんばるしかない。俺もがんばるけど。」

最近は周囲にある他の店舗と協力して、イベントなどもはじめています。「もうちょっと取手よくなってもいいかなって。微力ながら、最近思うようになったんだよね。順番回ってきちゃったのかなって。でもけっこう大変で、胃が痛い。でも中年がわざわざ、くだらないことをやって楽しんでれば、やりたいって思える人も増えるかなって。俺もはじめてみたら、そういう話をする相手ができてよかったんだよね。若い人がやってるといい意味で悔しい。」

「誰かにバーやってもらって、毎日カウンターの端っこで飲んでたいね。あのペロペロのおっさん誰って言われるような。変わらない方がいいよ。でもなんか好き、みたいなのがいい。取手もそうあってほしいかな。あんまり、張り切りすぎないのがね。」

悟さんの話を晃子さんがずっと笑顔で聞いている。雰囲気心地よくて、ずいぶん長居してしまった。ちょっと慌ててしまいうるとき、また来たいな。そう思う場所だ。



ぜひお気軽に
お越しください

SHOP DATA



Dandelion café (ダンデライオン・カフェ)

◎ [ランチ] 11:30~15:00 (L.O. 14:30) 水日祝休

[バータイム] 19:30~1:00 日祝休

◎ 茨城県取手市取手3-6-39

☎ 0297-73-7950

Facebook Dandelion-Cafe-405661092875161

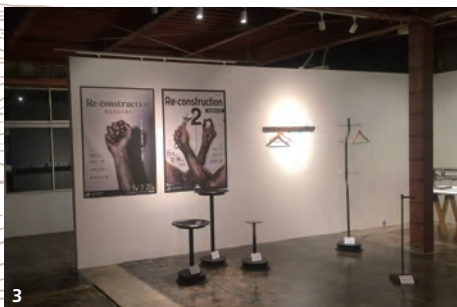


HAN-NŌ HAN-GEI

Artist in Residence Program

取手アートプロジェクト

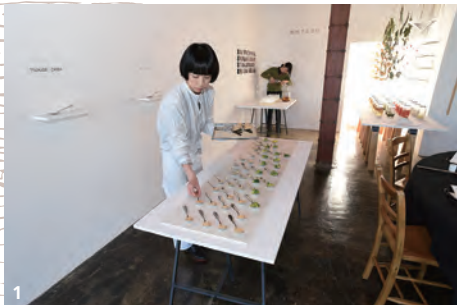
半農半芸

アーティスト・イン・レジデンス
「%「パーミル」」
会場＝TAKASU HOUSE プロシキトデザイナー＝岩間賢

1.引退した田植機が作家の手により変身する 2.ケーブルコネクタが照明器具になった「ジャンパーライト」
3.鉄道部品の廃材を利用したインテリア群 4.会期後、手すりに生まれ変わったトラクターの耕転爪

A

ふたたびの出会いからはじまること 農機具の再生
アーティスト＝Project RECON (田中 平・田村洋介・伯耆田卓助)
会期＝2015年6月12日(金)→7月5日(日)の金土日



1.オープニングでは作品にちなんだ料理がふるまわれた 2.土地で出会った素材とイメージが詰まった小瓶
3.2015年冬に植樹したブルーベリーの苗 4.作家の活動紹介として他地域で手がけた作品を展示した

B

風景からはじまること
アーティスト＝風景と食設計室ホー (高岡友美・永森志希乃)
会期＝2015年3月21日(土)→4月19日(日)の土日月火

TAKASU HOUSE (高須ハウス) は、かつて農協の支所だった古い建物をアーティストの岩間賢と協力者たちが改装して、アトスベースに生まれ変わった場所だ。農地に囲まれた市のはずれの高須地域で、取手アートプロジェクトの《半農半芸》が進み、パートナーとなる8組の作家たちが個々のアプローチで実験を続けている。昨年からアーティスト・イン・レジデンス・プログラム「% (パーミル)」がはじまった。

共同アトリエ「スタジオ航大(こうだい)」を運営する取手のアーティストたちだ。《半農半芸》では農協や高須地域とのつながりを基に使い終えた農機具を素材とした作品に取り組んでいく。

一方、2人組のアーティストユニット「風景と食設計室ホー」は、「遠くの風景と、ひとさじのスープ。世界と、わたしの手のひらは、繋がっている。」をコンセプトに、食を風景・文化・社会の切り口から捉え、その時その場所での体験できない食のインスタレーションを展開している。TAKASU HOUSEでは周辺の休耕地を活用してブルーベリーの実験栽培を開始した。初めての収穫は初夏の予定だ。高須にアーティスト独自の『畝』を入れた活動がはじまっている。



TAKASU HOUSE (茨城県取手市高須2156)

取手アートプロジェクトペーパー『あしたの郊外』創刊号 2016年6月10日発行

主催・発行＝特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス 企画＝ダンチ・イノベーターズ・チーム(DIT) 協賛＝UR都市機構
協力＝戸頭団地自治会、戸頭町会、取手井野団地自治会、UR都市機構、株式会社OpenA、関東鉄道株式会社

執筆・取材・編集＝新堀学、熊倉純子、中嶋希実、羽原康恵、緒方彩乃 デザイン＝森垣賢

お問い合わせ＝取手アートプロジェクト実施本部 〒300-1522 茨城県取手市高須2156 TAKASU HOUSE

TEL・FAX: 0297-84-1874 (電話は火・金13:00-17:00) WEB: http://www.toride-ap.gr.jp Twitter: @toride_ap

年間購読のご案内

年間購読料：年2回発行500円／年
(送料・手数料) 本紙を設置していただける施設の募集も行っております。

本紙記者募集中!

プロジェクトに市民記者(無償・取材時交通費支給)として参加しませんか。興味のある方ならどなたでも。

購読申込・記者申込は、✉ tap-info@toride-ap.gr.jp まで

本紙をいっしょに読みたい
ご意見・ご感想などを
ぜひお聞かせください